

野田の戦い あらまし

<野田3代と野田城の戦い>

野田菅沼の初代織部 正 菅沼新八郎定則は、田峯城主菅沼定忠の三男でしたが、建武の中興以来、東三河の勢力をふるった名門富永氏とみながに後継ぎがないため、後継として迎えられ永正3年(1506)野田館えいしょう(千歳野館)に入った。しかし、館がたびたび水害に遭うため、上ノ山えいしょうに新たに城を築き(野田城)、永正13年(1516)に移転した。



菅沼定盈公画像(宗堅寺蔵)

定則は、初め今川氏に属し、三遠きょうろくの各地に転戦して功をあげ、享禄2年(1529)11月には松平清康きよやす(家康の祖父)に従って宇利城を攻め、その功によって宇利・山吉田の両郷を賜わった。後に仏門に入り、大洞山泉竜院おおぼらさんに不春軒を建て、禅の道を学んだ。

2代定村は、今川義元こうじに仕え、弘治2年(1556)8月、東三河勢の先陣として、額田郡兩山砦を攻めたが、武運つたなく、同地で弟、定貴、定満とともに討ち死にした。

3代定盈さだみつは、桶狭間の戦いの後、松平家康えいろくに従い、永禄4年(1561)7月、今川勢に野田城を奪われたが、翌年取り戻した。その後一時大野田城に移り、元龜2年4月武田勢に急襲され、城を焼いて西郷に避難し、後再び帰城した。

武田信玄げんきは、元龜3年12月、三方ヶ原で徳川家康を打ち破り、年が明けると、野田城を囲んだ。このころ信玄は健康がすぐれなかったので力攻めを避けて城内の井戸水を抜く戦術をとり、定盈は1か月あまり、城を固く守って抵抗したが、山家三方衆の仲介で降伏した。

信玄は、帰国の途中で病死したが、ある夜、堀端近くで、村松芳休の笛に聞きほれて、鳥居半四郎の鉄砲に撃たれた傷が原因という伝説も残されている。



武田信玄を撃つたとされる信玄砲(宗堅寺蔵)

野田の戦い

げんき 元亀4年(1573)、正月 じょうらく 上洛の悲願に燃える
武田信玄が野田城を包圍した。菅沼定盈さだみつの守る
この城は、小城ではあるが、備えが堅く、城兵
の士気も盛んで、なかなか攻め落とせない。

武田勢は長期戦を覚悟して、まず 竜淵りゅうぶち・桑淵くわぶち
の水を落とし、甲州の金掘衆を呼んで本丸の東
と西から坑道を掘って、井戸水を抜く断水戦術
をとった。



急を聞いた徳川家康は旗頭山まで出陣したが、武田の大軍に敵しがたく吉田城に退き、定盈は1か月あまり持ちこたえたが、水を抜かれ、援軍も来ないので城兵の命と引き換えに開城降伏した。

その後、武田信玄の病状が悪化し、甲斐へ引き返す道中で亡くなった。徳川は危機を脱し、3月10日に定盈は武田家との人質交換で解放された。家康は、長篠城を奪還し、野田城も翌天正2年(1574)年に定盈が奪還し、再度入城した。

『笛のひびきと信玄砲』

野田の戦いの時、伊勢山田の村松芳休ほうきゅうという笛の名人が、城内で毎夜笛を吹いた。妙なるその音色に敵味方とも感じ入った。城中の鳥井半四郎が堀端に紙を付けた竹の立ててあるのを見て、これにねらいを定めて鉄砲を据えて待った。2月9日の夜、笛の音につられて人の気配があり、鳥井が引き金を引くと「大將が撃たれた」という声が上がり敵陣が動揺した。翌日、和議の矢文やぶみが城中に届いたという。

信玄は、数年前から健康がすぐれず、病気をおして出陣しており、一般には死因は病気説である。最後の地は信州駒場が定説となっている。また、野田城での鉄砲傷がもとで死んだとも伝えられている。宗堅寺にある13匁玉の信玄砲がそれだという。

野田城平面図



<野田城の歴史>

- ・永正5 (1508) 年 菅沼新八郎定則が築城
- ・天文13 (1544) 年 2代定村, 家督を継ぐ
- ・弘治元 (1555) 年 定村, 雨山の戦いで討死。翌年, 定盈相続。
- ・永禄4 (1561) 年 今川氏真に攻め落とされる。
翌年奪還。城の修理のため大野田城に移る。
- ・元亀2 (1571) 年 武田信玄来襲。定盈大野田城に火を放って西郷に退く。
武田勢, 兵をおさめ帰国。定盈修復なった野田城に戻る。
- ・天正18 (1590) 年 定盈は上州阿保に移封される (1万石)。